

(井上)

報道を通して見るだけでは分からない、その場にいる全員が平和な世の中を求めている式典での空気感と言葉では表現できないほど張り詰めていてとても印象的でした。黙祷では、会場で実際に黙祷をしたからこそ、ここにいる人たちだけでなく世界中で同じ瞬間に追悼の意を表し、平和を求める人が多くいることを実感することができました。また、こども代表による「平和への誓い」が印象に残りました。「過去に起こったことを変えることはできません。しかし、未来は創ることができます。」この言葉には、私たち若者にもできることはあり、諦めるのではなくできることから、着実に世界平和に繋げていくことが大切という



思いがこもっていると感じました。できることを模索し、考えるだけでなく行動に移していきたいです。

(甲斐)

広島市の市長をはじめとする方々が話されていたことは、どれも心に響くものでした。特に、こども代表の2人が平和への誓いで話していた内容を聞いていると、自分の大切な人が戦争で亡くなってしまうのは、本当につらくて、そこから立ち直ることも私はできないのではないかと思います。これから先、戦争が繰り返されないために、広島であった原爆被害のこゝろや一人ひとりのエピソードを、語り継いでいかなければならないと考えさせられました。



8月6日(土)平和記念式典

## 2022(令和4)年折り鶴平和大使のヒロシマ日記



川西市では、非核平和都市宣言の趣旨の通り、市民平和推進事業として、毎年「折り鶴平和大使」派遣事業を実施しています。

3年ぶりの派遣となった、今年度の折り鶴平和大使に選ばれたのは、川西緑台高校3年生の井上七海さんと緑台中学校2年生の甲斐純怜さんです。

2人の大使は、8月6日に広島市で開催されました平和記念式典に市民の代表として参列するとともに、市民が平和の願いを込めて折ったリンドウ色の折り鶴を平和公園の「原爆の子の像」に捧げました。



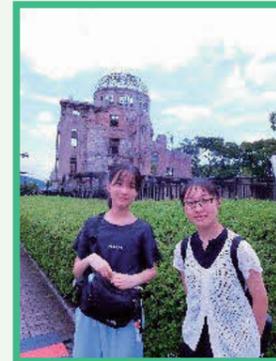
(井上)

原爆ドームをはじめとする遺構は、何年経っても被爆者の方々と共に戦争の恐ろしさを伝え続けていると感じ、その訴えを私たち若者が忘れてはいけなかったと思います。

(甲斐)

原爆ドームからは、77年たった今でも戦争の恐ろしさが伝わってきました。

川のすぐ近くを歩いた時、今私たちが何も不安に思わず歩いていることが、とても幸せなことだと心から思いました。



8月5日(金)広島到着

(井上)

市長さんから受け取った折り鶴は、とてもずっしりとしていて、市民の皆さんの平和を祈る思いが強くこもっていることを実感することができました。

(甲斐)

市長さんから受け取った折り鶴は、1羽1羽から平和への願いが伝わってきました。折り鶴平和大使になったからには、しっかりとその願いを届けようと思いました。



7月27日(水)市役所にて壮行式

## 折り鶴平和大使になって

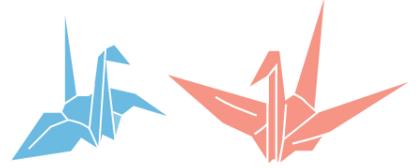


井上 七海さん

平和大使としての活動を通して、原子爆弾は、尊い命を一瞬で奪うだけではなく、被爆した方の心にも一生消えない深い傷を残しました。なぜ死ななければならないのか。自分のせいで死んでしまった。自分がなぜ生き残ってしまったのか。このようなことを考えさせてしまう戦争は、間違っています。世界に目を向け、戦火に怯え苦しんでいる人を、一刻も早くなくしたいと強く思いました。また、私たちが平和に暮らすことができているからこそ、今苦しむ人々に対してできることを考えていくことが大切だと思います。私たちにできることは小さいかも知れませんが、しかし、未来から目をそらさず、思いやり・助け合いの心を持って生活することは誰にでもできることです。互いに声を掛け合いながら、諦めずできることを探して、一歩ずつ世界恒久平和に向けてバトンを繋げていきたいと思っています。

甲斐 純怜さん

平和記念式典に参列したり、被爆者体験談を聞いたり、貴重な体験をさせていただきました。小学生の時に戦争についてインターネットなどで学んだことよりも、さらに深めることができました。平和記念公園のほかに、折り鶴タワーなどにも行かせてもらったのですが、どこに行っても戦争に関連するものが展示されていました。それくらい原爆が落とされた戦争はすごいものだったけど、もう二度と、どこでも原爆は使ってはいけないものだと思います。原爆によって亡くなった数十万人の人々のためにも、これからは平和な世界を自分たちでつくっていかなければならないと思います。



### 非核平和都市宣言

世界中の人々が等しく平和な暮らしを営むことは、人類共通の願いです。それにもかかわらず、地球上の全生命を滅ぼしてもなお余るほどの核兵器が蓄積され、世界の平和に深刻な脅威を与えています。

わが国は世界で最初の核被爆国として、核兵器と戦争の恐ろしさを全世界に訴え、その惨禍を絶対に繰り返させはなりません。

私たちは祖先から受け継いできた猪名川の清流、豊かな緑、そして人類共通の財産である青く美しい地球を永遠に守り続けていくためにも、核兵器をつくらず、持たず、持ち込ませず、「非核三原則」を遵守するとともに、恐るべき核兵器の廃絶を願い、人と人が憎しみあい傷つけあうことのない世界の創造を求めて、ここに市民の総意のもと、川西市を「非核平和都市」とすることを宣言します。



平成元年(1989年)7月14日  
川西市

広島平和資料館を見学

(井上)

折り鶴は、奉納する場所がないほどたくさん捧げられていて、世界中から集まった平和希求の強い思いがひしひしと伝わってきました。公園内ではたくさんの方が折り鶴を捧げている姿が目にとまり、私たちが担う役割の大きさを感じました。

(甲斐)

ケースいっぱいに入った全国からの折り鶴がありました。全国の方が平和を願っているのだと感じました。戦争をしている国や世界の人々に見てもらいたいと強く思いました。



(井上)

資料館では、多くの画像や映像、そのほかにも多くの遺されたものが原爆の恐ろしさを訴えかけていました。今にも「助けて」「水をください」、そう叫びだすような品々に目を背けなくなる時もありましたが、当時の人々が感じた恐怖とは比べ物にならないものだと思うと、今の日本が平和であることがどんなに幸せなことかということ、そしてこの平和を守っていかなくてはならないということを感じました。私たちに日々の日常は当たり前ではなく幸せなことであるということをおぼろげに感じたいと思いました。

(甲斐)

たくさんの方が真剣に見学していました。資料館には、原爆が投下された当時のままの服やお弁当が展示されていました。元の姿からボロボロになった姿までのことを考えると、とても胸が痛みました。それ以外にも、さまざまな人たちの人生が紹介されている場所がありました。普通に家族や友人と楽しく笑って過ごしたかったはずなのに、原爆が落とされたことで、その普通がもうやってこないのは、言葉に表せられないほどつらかったと思います。もう二度と同じようなことは起きてほしくないと思いました。



折り鶴を捧ぐ